アンフォルメル雑感
山内重太郎

今秋はマチウ、タビエ、サム・フランシスの来朝、および今井俊満の帰国によって、わが美術界はアンフォルメルの旋風に見舞われ、 既にアンフォルメルに対する批判も相当現われてきているようであるが、アンフォルメルに共感を持ち、作画の基調をその方向に求めている私は、私なりの感想、理解を述べて見たいと思う。

ダダはギリシャ的古典主義美学を基礎とする芸術に対して、果敢な破壊を行った。これは世界大戦という史上最大の不幸によって呼び覚された、ヨーロッパの合理主義に対する懐疑と不信の芸術的反映であった。また、ダダを母体として現われたシュール・レアリズムは、単なる非合理的文学性の導入に終り、人間性の基盤に立つ造型の本質的な変革は行われなかった。シュールと平行して発展して来たアブストラクト・アートも、その華々しさにも拘らず、従来の古典美学的有限空間の概念から一歩も出ることが出来ず、今日、その大半は、單なるアカデミズムに惰してしまっている。

このようなダダ以後の造形芸術の文学化または硬化現象に対して、形式に捉われず、生命感と、物質の存在感を、本源的な感動にもとづいて、生々しい表現として意図するものがアンフォルメルである。 従って、ここでは、当然従来の古典美学的造型思考は否定され、空間概念の変革、マチエルに於ける意味の再認識、イメージの強烈さというものが企図される。ダダ、或はシュールの創造した、彫刻でもなく、絵画でもない造型的構成物、即ち、オブジェによって意図された所、つまり、日常性を剥奪された物体の構成による物質を創造することによって、強烈な感動を与えること、即ち物質自体のもつ表現性の高度の表出によつて、アンフォルメルは達成されるの である。

アンフォルメルに於て注目すべきことは、従来の造型芸術がギリシア的有限空間に基礎を置いていたことに比して、無限空間の概念を導入し、しかも、近代数学に於ける集合論、位相幾何学の概念を以て理論化を行っていることである。ところが、ひるがえって、われわれ東洋の伝統的造型空間を考えて見ると、既に最初から「別個の空間としての無限空間であるから、アンフォルメルのいう無限空間とは違った、新しい空間の発見も可能である。われわれは、自身の空間を、伝統と、現実のなかに発見し、国際的視野に於て把握表現しなければならない。その意味で、東洋的無限空間を醸成し来った東洋哲学の再認識ということも、今日重大な意義を持っていると思われる。

私はアンフォルメルの出現を、右に述べた意味で、新しい美術への大きな指標であると考えている。